

2. 鳥類

(1) 静岡県における生息種及び分布の特性

鳥類が他の生物と大きく異なる点は強力な飛翔力を持つことである。県境はもとより海を越えて往来するものの方がむしろ多い。彼らの生息は県内の状況だけにとどまらず、国内の他地域のほか、繁殖地のシベリアや越冬地の東南アジアなどの気象、経済活動、食文化などさまざまな因子に影響されている。このことは、グローバルな時代に生きる私たち人の生存が身の回りのことだけでは済まないこととまったく同じで、“Today birds, tomorrow men”といわれるゆえんである。

静岡県内における在来種鳥類は、22 目 72 科 403 種である。これは日本産鳥類 633 種（日本鳥学会，2012）のほぼ 63.7 %に及ぶ。内訳はキジ目 4、カモ目 35、カイツブリ目 5、ネッタイチョウ目 2、ハト目 3、アビ目 4、ミズナギドリ目 18、コウノトリ目 2、カツオドリ目 7、ペリカン目 19、ツル目 13、カッコウ目 4、ヨタカ目 1、アマツバメ目 3、チドリ目 105、タカ目 19、フクロウ目 6、サイチョウ目 1、ブッポウソウ目 5、キツツキ目 5、ハヤブサ目 4、スズメ目 138 である。一県の生息種数としては全国屈指である。本県の鳥類相が豊かである理由としては、次のことが考えられる。

- ・ 海拔 0 m から富士山・南アルプスの 3,000 m 級の山岳に及ぶ日本一の標高差があること。
- ・ 多数の湖沼・河川及び内湾や長い海岸線など豊富な水系に恵まれていること。
- ・ 四季を通じて温暖な上に本州の中央部にあり夏鳥・冬鳥双方の生息に適していること。
- ・ 本州中央部の立地はまた、繁殖・越冬以外の多種の渡り鳥の中継地に当たっていること。

このような地理的に恵まれた条件は県全域に遍在している訳ではない。たとえば 1,000 m 級以上のブナあるいはトウヒなどを中心とした自然林は中部奥、富士山、伊豆の山岳地帯に多いが、サンコウチョウ、オオタカなどの主な生息地である里山的環境は西部から中部に広がっているし、シギやチドリ類などが依存する広い湿地や内陸水系は圧倒的に西部地域に偏るなどの地域差がある。しかし、各種のカテゴリーは、極力県全体の視野から判断するように努めた。

(2) 調査の概要

部会員と調査員が現地調査及び資料調査を実施した。現地調査は 2009～2016 年の 8 年間と長い期間に見えるが、当初の数年は予算も調査体制も十分でない形でのスタートを余儀なくされた。えられた記録は限定されたものであったので、スタッフの個人的な調査記録の提供を受け、2017 年には補足調査を実施した。現地調査は夜行性の種を対象とする夜間調査も実施した。しかし、東部・伊豆の一部に調査未実施地域が残った。資料調査として、スタッフの 2007 年以後の個人の研究、フィールドノートの資料の提供を受けた。現状の記録を 2007 年以後としたのは、「10 年ひと昔」と言われているが、環境変化の著しく速い現在において 10 年を超えたものは「現在と比較すべき過去の記録」と判断したためである。なお、視認観測しにくい種については環境省が推進する標識調査のライセンスを持つ部会員・調査員の個人的な標識調査に依存した。

(3) レッドリスト種の選定経緯

静岡県レッドデータブック（2004）にリストアップされたものについては、現状の調査を実施しながら 16 種を取り上げてカテゴリーと現状との整合性の検討を行い、6 種をランクアップ、3 種をダウンした。また、リストアップされていなかった種から 12 種を新たに取り上げ、それ以後の状況及び今回の調査でえられた知見から判断し、6 種をリストアップした。

本来の生息地以外への迷行や 1980 年以降の記録が 1～2 例のものは選定しなかった。また、人為的に外国から移入された「外来種」は繁殖定着歴の長短に関わらず選定対象外とした。

(4) レッドリストの改訂で明らかになったこと

掲載種数は、前回(2004年)は72種、今回は78種で6種増加した。絶滅のおそれのある種の総数は、前回(2004)は44種で今回は52種である。内訳は絶滅危惧ⅠA類(CR)6種、絶滅危惧ⅠB類(EN)14種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)32種である。このうち水系に依存するチドリ目は18種34.6%と最も多く、猛禽類のタカ・ハヤブサ・フクロウ目の計11種21.2%と併せて55.8%と過半数を占めている。その他は準絶滅危惧14種、情報不足4種、要注目種8種である。

地図表示については保護の観点からイヌワシ、ブッポウソウ、ヤイロチョウは表示せず、その他必要な種は2次メッシュにとどめた。また、夏鳥は保護対象が繁殖地であることから渡り途中の記録は表示しなかった。例外として我国では夏鳥でありながら県内に繁殖地のないイイジマムシクイ、ウチヤマセンニュウを前回(2004)情報不足(DD)としたのは、ともに希少鳥類であり(前者は天然記念物でもある)、伊豆諸島で繁殖する個体群のすべてが県内を渡りの中継地とすると推定されつつ実態がほとんど知られていなかったからである。今回標識調査などで渡りの時期や中継地の環境が明らかになったので、中継地を表示するとともに絶滅危惧Ⅱ類(VU)にランクアップした。

(5) 減少の主要因と脅威

ひとくくりに言えば生息地の減少、生息環境の悪化ということになる。絶滅危惧種の多いチドリ目については生息基盤の湿地の減少、干潟の浚渫などによる餌場の消失、植生遷移、レジャーなどの人為的攪乱による繁殖阻害が従来からの脅威であるが、新たに誤食による弊害など、マイクロビーズの問題が加わった。その次に絶滅危惧種の多い猛禽類についても、必要とする広大な生活圏の開発やそれに伴う採餌対象生物の減少などが憂慮される。

(6) 注目される種のカテゴリーと変更理由

特に注目される該当種はない。

(7) 考えられる保全対策、今後の留意点

長期的な視点に立った生息環境の保全や適正化が必要である。たとえばコアジサシの例では、天竜川中州の裸地環境を復元したケースでは、重機を使った嵩上げ造成をして好適環境を作り出しても、植生遷移の速度は速く数年で草に覆われさらに数年でヤナギの灌木林地になる。この造成からその後のメンテナンスまで民間のボランティアに支えられてきたが限度がある。行政あるいは当委員会が重点目標を集約し、管理者への啓発・要請にあたることも必要であろう。

(8) 文献(多くの種で引用した文献)

鳥類は生態の多様性があり科学機器の長足な進歩を伴って様々な分野で研究が進んでいる。幅広い文献を網羅するすべもないが、鳥類部会では参考文献ではなく「引用文献」に限って記すことにした。中でも多くの種で利用したものは以下のとおりここに記し、各種の記述では省いた。①は学名、分布に関して全種で利用した。②は詳細な食性や生態、③は計測値、食性、形態、生態、過去の繁殖分布など全般。④⑤は計測値、特徴、分布などを多くの種で利用した。これら以外の各文献の利用は各種の中に記載した。

① 日本鳥学会 編(2012) 日本鳥類目録 改訂第7版. 日本鳥学会, 兵庫, 438 pp.

② 清棲幸保(1978) 増補改訂版 日本鳥類大図鑑Ⅰ～Ⅲ. 講談社, 東京, 1002+236 pp.

③ 清棲幸保(1966) 野鳥の事典. 東京堂出版, 東京, 413 pp.

④ 真木広造・大西敏一・五百澤日丸(2014) 決定版日本の野鳥 650. 平凡社, 東京, 788 pp.

⑤ 叶内拓哉・阿部直哉・上田秀雄(2014) 山溪ハンディー図鑑 7 新版日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京, 671 pp. (北川捷康)

ヘラシギ *Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus, 1758)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A 類(CR) (要件-①②) 変更コード 9

[2004 年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR)]

1. 種の解説

全長約 15 cm。小型のシギ。成鳥夏羽は頭部から胸部が赤褐色になり、背面の羽縁も同色。冬羽は頭部から背面は灰色で下面は白い。幼鳥は成鳥冬羽に似るが、上面は黒褐色で羽縁は白っぽい。雌雄同色。先端が幅広いスプーン状の嘴が最大の特徴で、その部分を水中に入れて左右に振りながら開閉して小さな甲殻類やその幼生などを挟みとって食す。世界的な希少種で推定個体数は多く見積もっても 400 羽、少なく見積もると 250 羽程度とされている。旅鳥(対象:生息地)。

2. 分布

国外ではシベリア北東端のチュコト半島からカムチャツカ北部の限られた地域の海岸部だけに繁殖し、中国南部からインドシナにかけての沿岸部で越冬する。国内では旅鳥として全国で記録はあるが、個体数は極めて少ない。県内では 2000 年までに伊豆から東・中・西部までごく少数ながら記録があった。

3. 生息環境

静岡県を含めて国内では渡り期の中継地として砂浜海岸とそれに続く河口、干潟を利用している。

4. 生息状況

1960 年代から 2000 年までは伊東大川河口(酒井)、富士川河口(神谷)、菊川河口(北川)、太田川河口(宮本)で各 1 例、御前崎海岸で 3 例(坂本、大石、伊久美)の記録があり、ほとんどが 1 羽であったが 1985 年の御前崎では 6 羽を観測(北川)した。しかし、2001 年以降は 2004 年の太田川河口及びその隣接地(今井)での生息記録しかない。いずれも秋の渡り期の 8~10 月の記録である。単独あるいはトウネンなどの小型のシギ類の小群に混じっていることが多い。

5. 減少の主要因と脅威

重要な渡りの中継地である静岡県内の砂浜の海岸や河口部は、一年中レジャー圧を受け続けている(71)。海岸砂浜の痩せ細り(25)の中で、釣り(夜の釣り人口も昼に劣らない)、サーフィン、パラグライダー、四輪駆動車などの往来により、餌場と休眠場所の消失(71)による影響が今後とも続く。

6. 保護対策

生息環境創出として養浜に期待したいが、急深な駿河湾・遠州灘の海底構造では不可能と思われる。

7. 特記事項

何千 km という長距離の移動をする種にとって最も命に危険をもたらすのは渡りである。安全な渡りの中継地の意味は、天候の急変(海の藻屑)、膨大なエネルギーの補給、天敵(人のレジャーが最大の脅威)を避けて疲れをいやす休眠場所の確保などの困難をクリアしたものだけが、次の繁殖期に子孫を残せるのである。また、採餌に関してマイクロプラスチックを誤飲する問題もある。なお、東南アジアの越冬地では、かすみ網で大量のシギ類を密猟しており、本種が 1 シーズンに 10 羽も捕獲されたとの情報もある。

種の保存法に基づく国内希少野生動物種(平成 29 年)。

8. 主な文献

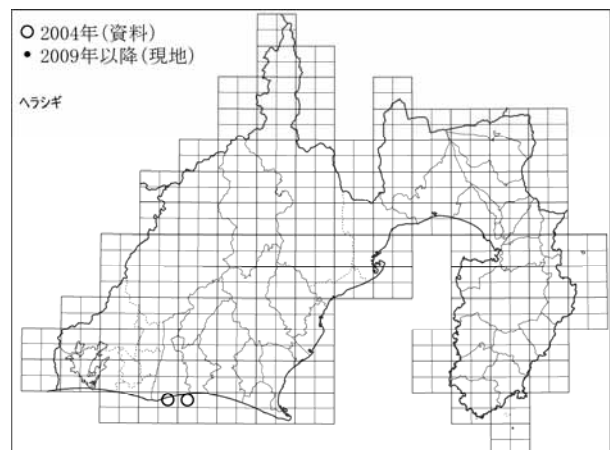
北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料。遠州の自然, (41): 25-29

静岡県の鳥編集委員会(1998) 静岡県の鳥類, pp. 85. 静岡県環境部自然保護課, 静岡。

富田 宏・柏木 実 ラムサール・ネットワーク日本(2014) 絶滅の危機! ヘラシギを救うために パードリサーチ水鳥通信 4: 4 (北川捷康)



太田川河口 2004 年 9 月 25 日 北川捷康



カンムリウミスズメ *Synthliboramphus wumizusume* (Temminck, 1836)

ウミスズメ科 Alcidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A 類(CR) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

全長約 24 cm。ウミスズメ *S. antiquus* に似るが、本種は夏羽には頭部に 3~5 cm ほどの冠羽がある。ウミスズメ類のなかでは唯一暖海域で繁殖する。雌雄同色。つがいあるいは小群で行動することが多いが、時には数十羽の群れを形成する。潜水時には半開きの翼を空飛ぶ鳥のように羽ばたかせて推進力を得、小魚などを捕食する。留鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

分布は日本周辺に限定され、国外では韓国全羅南道九屈諸島での繁殖記録がある。国内の繁殖地の北限は石川県七ツ島、南限が伊豆諸島の鳥島である。主な繁殖地は宮崎県門川町枇榔島や伊豆諸島などである。県内では伊豆下田沖の神子元島で繁殖する。繁殖後は伊豆半島から天竜川にかけての沿岸域で観察される。

3. 生息環境

沿岸域や離島の波の届かない崖穴や岩の隙間を利用して繁殖する。親は孵化後 1~2 日の雛と共に巣を離れ、次の繁殖期まで洋上生活を続ける。

4. 生息状況

1983 年以前には下田市沖の神子元島で繁殖していたが、それ以後の繁殖記録は途絶えていた。（公財）日本野鳥の会（東京）が 2010 年から神子元島の繁殖の復活に取り組み、試行錯誤の末に 2016 年に人工巣による繁殖に成功した。この年は人工巣 3 巣、続く 17 年は同 2 巣で巣立ちに成功している。

非繁殖期の動向は、かねて駿河湾・相模湾で冬期に観察されており、それらは伊豆諸島の繁殖群と考えられてきた。しかし、最近のジオロケータ装着調査により、福岡・宮崎・高知県で繁殖期に装着された個体が、5 月頃に関東地方、7~9 月には北海道の沿岸で過ごしていることが判明した。天竜川河口~御前崎にかけて 3 月に 4~30 羽がしばしば観察されている（今井敦氏私信）。繁殖に入る直前の伊豆諸島の個体群と推測される。

5. 減少の主要因と脅威

県内唯一の繁殖地の神子元島（61）は無人島だが、多くの磯釣り客を渡船が運んでいる（51）。他の繁殖地では、ネズミの侵入により激減した例やカラス類による捕食が知られている。神子元島の自動カメラに、巣をのぞき込むハシブトガラスが映り（52-4）、離島でも残飯などによる天敵の誘引が確認された。また、餌の魚を追って時には水深 40 m まで潜水するといわれ、この時に刺し網に掛かって命を落とす（41）ケースは海鳥全体の宿命であろうか。海難事故で重油流出による海洋汚染（71）も大きな脅威である。

6. 保護対策

（公財）日本野鳥の会の保全プロジェクト推進室が 2009 年から海洋環境保全のシンボルとして本種の調査・保護・啓発活動に取り組んでいる。本県としてもこの活動に協力するべきであろう。

7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物（昭和 50 年）。

8. 主な文献

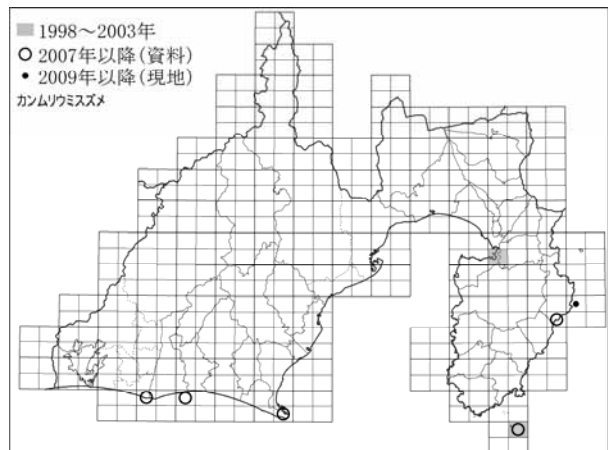
（公財）日本野鳥の会（2016）Annual Report 2015 カンムリウミスズメ保護事業活動報告書：2-5

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料。遠州の自然，（41）：25-29

（北川捷康）



三宅島三本岳付近 2008 年 4 月 29 日 日本野鳥の会



イヌワシ *Aquila chrysaetos* (Linnaeus, 1758)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A 類(CR) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN)]

1. 種の解説

大型の猛禽類で全長オス約 81 cm、メス約 89 cm である。翼開長 167~213 cm。成鳥はほぼ全身が暗褐色で後頭部から後頸が金色を帯びる。幼鳥はほぼ黒褐色であり、飛翔時に翼の風切基部と尾羽の基部の大きな白色部が明瞭である。飛翔力が大きく、つがいごとに広い行動圏を持ち、留鳥として周年同じ場所に生息する。ノウサギ、シカ、カモシカ、テンなどの哺乳類のほか、ヤマドリなどの鳥類やヘビ類も捕食する。繁殖期は 12 月からの求愛に始まり、1~2 月産卵、4~5 月育雛を経て、6 月頃が巣立ちである。留鳥 (対象: 生息地)。

2. 分布

国外では北半球に広く分布する。国内では北海道、本州、四国、九州の山岳地域で生息が確認されており、四国をのぞく地域で繁殖が確認されている。県内では天竜川、大井川、安倍川の各河川中・上流域、富士山周辺、伊豆などで観察例があるが、東部から伊豆では一時的な記録が多い。

3. 生息環境

山岳や高原地域が主な生息環境である。人為的影響を受けやすく、外敵の近づけない急峻な地形の場所が生息地となっていることが多い。巣をつくることのできる岩場や大木、豊富な餌量と適当な狩場 (草地、伐採地、疎林などのギャップ、深い谷など) の存在が生息環境の条件と考えられる。

4. 生息状況

以前より長野県、山梨県に接する県境周辺のほか、東部から伊豆では、少数の観察例があった。1990 年代後半頃より南アルプス山系を中心に観察例が増え、つがいと思われるものも複数ヶ所で観察されている。繁殖については、日本イヌワシ研究会の調査などによるごく少数の確認例はあるが、県内の生息情報は依然として部分的、断片的である。

5. 減少の主要因と脅威

全国的な繁殖成功率低下の原因として挙げられている餌不足 (71)、無作為な開発 (11) や林業の低迷 (54)、狩場の減少 (53) は、本県においても該当すると考えられる。大型猛禽類の生息に最も重要とされる環境要素は餌生物である。県内の森林は生物相の貧弱なスギ、ヒノキなどの人工林が多くを占めていることから、餌不足が減少の主要因として挙げられる。

6. 保護対策

森林の多様性を高めるための低密度植栽、広葉樹林化などのあらゆる施策が、生態系の底辺を担う生物相を豊かにし、ひいては高次消費者の大型猛禽類の長期的な保護対策につながるものと考えられる。

7. 特記事項

文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 40 年)。種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (平成 5 年)。

8. 主な文献

近藤多美子・山田律雄 (2012) 静岡地区におけるイヌワシと調査のあゆみ. *Aquila chrysaetos*, 23・24: 48-50

日本イヌワシ研究会 (2017) 全国イヌワシ生息数・繁殖成功率調査報告 (1981-2015). *Aquila chrysaetos*, 26: 1-8 (新井 真・近藤多美子)



静岡県 2014 年 10 月 20 日 峰岸郁生



保護上の観点から分布位置は非公表

ブッポウソウ *Eurystomus orientalis* (Linnaeus, 1766)

ブッポウソウ科 Coraciidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A 類(CR) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN)]

1. 種の解説

全長約 30 cm。嘴は幅広く赤い。頭部は黒色で他の部分は青緑色をしている。翼の初列風切羽に大きな白斑があり、飛翔時によく目立つ。雌雄同色。繁殖期には濁った声で「ゲッ ゲゲゲ・・」などと賑やかに鳴く。給餌期の餌内容は夜行性を含む甲虫類が多く、日中にはトンボ類、バッタ類、セミ類なども与える。育雛中の雛には餌の他に陶器片、小石、貝殻などを与えることがあり、消化を助ける「碾き臼（ひきうす）」と考えられている。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外ではヒマラヤから中国北東地方、ロシア極東南部、朝鮮半島で繁殖し、東南アジアで越冬する。国内では本州、四国、九州に夏鳥として渡来する。県内では、2001 年以降の繁殖は天竜川水系のみである。

3. 生息環境

平地の社寺林、低山・山地の林が従来の生息環境であったが、近年は山間部を流れる大河の橋梁付近のみを生息環境とするようになった。

4. 生息状況

かつては旧天竜市二俣町、山東、相津など市街地に接した社寺林など及び水窪町のスーパー林道付近、寸又峡付近などで繁殖していたが、2000 年以降は営巣場所が 2 ヶ所に限られ、その後は 1 ペアという危機的な状況に追い込まれた。さらに、2015 年以降に飛来はあったが、繁殖はなくなった。

5. 減少の主要因と脅威

県内最後となった営巣場所は橋のアーチ下部に開いたハンドホールであり、ある年にはオシドリとアオバズクとともに、隣接する 3 個のハンドホールの中に繁殖した。このことから樹洞を繁殖に利用する種にとっていかに住宅難であるかが読み取れる。樹洞のある大径木の減少（11）、他生物との樹洞などの利用の競合（56-2）、餌になる昆虫の減少（71）などのほか、アオダイショウによる卵・ヒナの捕食（52-4）や写真撮影のプレッシャー（71）による繁殖放棄と判断される状況まで生じるようになっていた。

6. 保護対策

営巣場所の確保。繁殖に利用している橋梁などの改修及び付近の工事は繁殖期を避けること。無知な写真撮影者へのマナーの啓発などが必要である。

7. 特記事項

中国地域では電柱などにかけた保護用巣箱の利用が多いし、長野県では天然記念物及び天竜村の「村の鳥」指定により、村民挙げての監視が写真撮影者の無茶な接近から守るなど、成果をあげている。しかし県内では筆者らが橋の欄干や林縁の樹木に継続的に巣箱をかけているがまだ成功例はない。ただ、標識調査により鳥取県と天竜村との個体群間の交流が明らかになったこと、県内複数ヶ所でペアが観察されていることなどから、新たな方式で繁殖復活を目指している。

8. 主な文献

公益財団法人 山階鳥類研究所（2018）IV-2-3-2 その他の希な回収記録（1）ブッポウソウ．平成 29 年度 環境省委託業務 2016 年 鳥類標識調査報告書，pp. 26-27．同研究所，我孫子市．

（北川捷康）



©2019 K.Kitagawa
浜松市天竜区春野町 2003 年 6 月 5 日 北川捷康



チゴモズ *Lanius tigrinus* Drapiez, 1828

モズ科 Laniidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A 類 (CR) (要件-③) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 I A 類 (CR)]

1. 種の解説

全長約 18.5 cm。体重 25～33 g。オスは頭頂から後頸は青灰色で額からの過眼線は黒い。背から尾の上面は赤褐色で黒褐色横斑がある。喉、頬、体下面は白く、脇に褐色の横斑のある個体もある。嘴は黒く、他のモズよりも太い。脚は灰黒色。メスは頭部が灰褐色。過眼線が不明瞭で特に目先は淡い。側胸から脇に褐色の横斑がある。夏鳥 (対象: 繁殖地)。

2. 分布

国外ではウスリー、中国東北部、朝鮮半島に渡来し繁殖する。冬期は中国南部、インドシナ半島、マレー半島、フィリピン、インドネシアに渡る。国内では本州中部から東北地方に夏鳥として渡来し、繁殖する。県内では富士宮市朝霧高原ほか数ヶ所で観察記録がある。

3. 生息環境

低地から山地の針広混交林・アカマツ林・落葉広葉樹林・雑木林などの林縁部、果樹園、クワ畑などで繁殖する。モズよりも樹木の多い場所を好み、高枝に営巣する傾向がある。新潟県から北の日本海側では、クロマツの防風林の背後に畑地が広がるような環境で多くの繁殖が確認されている。

4. 生息状況

県内では富士宮市朝霧高原で 1986 年まで繁殖期に生息が確認されていた。また、そのほか繁殖期の記録が数例あるが、1987 年以降は観察記録がない。全国的には、1978 年に実施された自然環境保全基礎調査で生息確認された場所の大部分が 1998 年には記録できなくなり、繁殖メッシュ数は 20 から 2 へ、繁殖の可能性のあるメッシュ数は 8 から 1 へ、生息を確認したが繁殖は不明というメッシュ数は 20 から 7 へと激減している。

5. 減少の主要因と脅威

富士宮市朝霧高原の生息環境に大きな変化は見られない。越冬地や渡り中継地の環境変化についての研究や分析はなく、減少の原因は不明である (99)。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

山岸 哲 (1997) チゴモズ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科第 4 巻 鳥類Ⅱ, p. 88. 平凡社, 東京.

影山秀雄 (2004) チゴモズ. 静岡県自然環境調査委員会 編, まもりたい静岡県の野生生物-県版レッドデータブッカー〈動物編〉, p. 56. 羽衣出版, 静岡.

植田睦之 (2005) 全国的に減少しているモズたち. BIRDER, 19(10): 32-37

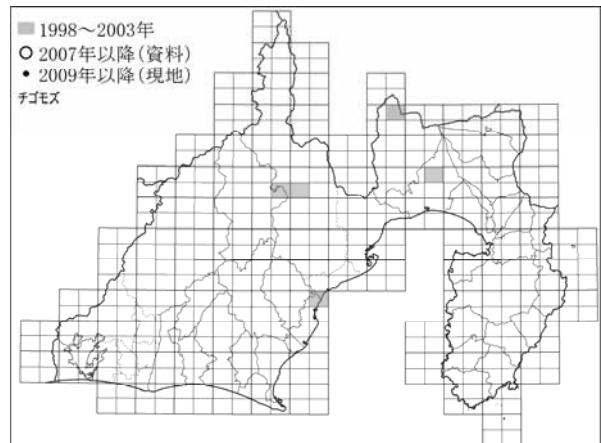
渡辺健三・渡辺喜美恵 (2007) 広島県内におけるチゴモズの繁殖記録. Strix, 25: 151-167

日本鳥学会編 (2012) 日本鳥類目録 改訂第 7 版. 日本鳥学会, 兵庫, 438 pp.

(渡邊修治)



山形県酒田市遊佐町 2016 年 6 月 25 日 渡邊修治



アカモズ *Lanius cristatus* Linnaeus, 1758

モズ科 Laniidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 A 類(CR) (要件-①) 変更コード 6

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN)]

1. 種の解説

全長 17～20 cm。体重はオス 27～34 g、メス 28～37 g。頭から尾羽までの上面は赤褐色。翼は黒褐色で羽縁は赤褐色。額、眉斑、喉、頬は白色。太くて黒い過眼線がある。胸以下の下面は黄白色で、側胸から脇は淡い橙黄色。嘴と脚は黒色。性的二型は顕著ではないが、オスは上面の赤褐色がより鮮やかで、額の白帯の幅が広い。メスには脇に褐色波状斑を持つものがある。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外ではロシアのチュコト半島、カムチャツカ、アルタイ、ウスリーからモンゴル、中国東北部、朝鮮半島などで繁殖し、インド、中国南部、東南アジアで越冬する。国内では夏鳥として北海道から本州、四国に渡来するが、分布はやや局地的である。県内では富士山麓の朝霧高原や御殿場高原に夏鳥として渡来する。

3. 生息環境

低地から山地の落葉広葉樹林の林縁、二次林、農耕地や草地の縁の藪、果樹園など、低木の疎林や藪の多い所を好む。富士山麓では樹高の低い落葉広葉樹林に囲まれた草地や牧草地を好み、密生した枝やノイバラなどの藪に巣を架ける。

4. 生息状況

朝霧高原では2000年には山梨県側を含めて15つがいの繁殖を確認したが、2017年には両県でそれぞれ1つがい、計2つがいの繁殖を確認したに過ぎず、激減している。生息に適した環境と思われる東富士演習場周辺でも生息は確認できていない。

5. 減少の主要因と脅威

朝霧高原ではゴルフ場・オートキャンプ場・フードバレーなどの為の土地造成（21、22、23）があり、1つがいは観察者・撮影者による迫害（71）が原因と考えられる。しかし、他のつがいでは原因不明である。

6. 保護対策

渡り性のモズ類は繁殖地に対する執着が強く、一度繁殖地を失うと復活させることはきわめて困難である。現在分かっている繁殖地の環境が現状変更されることのないよう監視する必要がある。また、越冬地や渡り中継地の環境を調査する必要がある。

7. 特記事項

フードバレーの開発に当たっては環境調査が行われ、アカモズの繁殖が確認された。しかし、周辺に繁殖適地があるという理由で開発は可能であると報告された。渡り性のモズは執着性が高いという認識に欠ける判断であった。有識者の意見を求める体制を構築することが必要である。

8. 主な文献

山岸 哲 (1997) アカモズ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸 哲 編, 日本動物大百科 第4巻 鳥類Ⅱ, p. 88. 平凡社, 東京.

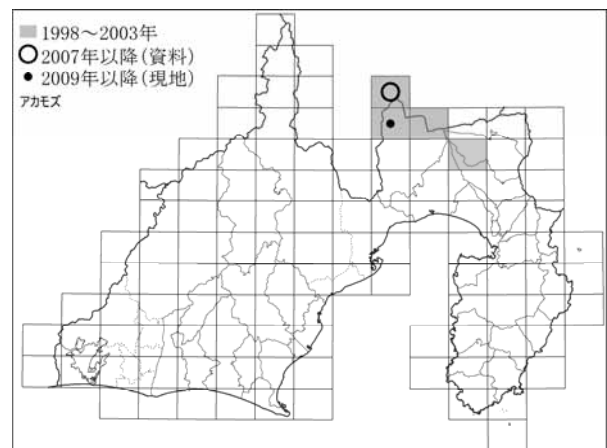
植田睦之 (2005) 全国的に減少しているモズたち. BIRDER, 19(10): 32-37

高木昌興 (2014) アカモズ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 編, レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 2 鳥類, pp. 118-119. ぎょうせい, 東京.

(渡邊修治)



富士宮市人穴 2009年6月1日 渡邊修治



サンカノゴイ *Botaurus stellaris* (Linnaeus, 1758)

サギ科 Ardeidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN) : 環境省カテゴリー : 絶滅危惧 IB 類 (EN)]

1. 種の解説

全長約 70～80 cm。中型のサギ。全身バフ色で頭頂と腮線は黒褐色、背面は黒褐色の斑が密にある。冬期に、生息する枯れたヨシ原でのカムフラージュ効果がある。雌雄ほぼ同色。生息環境と体色が似ているヨシゴイは、小さいこと、上面の黒褐色の密な斑がないこと、飛翔時に風切羽が黒いことなどで区別できる。

採餌は主として早朝と夕暮れ時に行うが、昼間でも行なう。魚類をはじめ、両生類、齧歯類、水生昆虫などを餌にする。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外では2亜種のうちの1亜種はアフリカで繁殖する。日本に分布するもう1亜種はヨーロッパでは分散しているが、ユーラシアの中北部を幅広く通ってオホーツク海沿岸までとサハリンで繁殖する。温帯から冷温帯南部、北アフリカ、南アフリカで繁殖する。ユーラシアの個体群は、非繁殖期にアジアのやや南部に渡る。国内では北海道及び本州の東北から近畿にかけての一部で繁殖し、その他の地域では冬鳥である。県内では伊豆、東・中・西部に少数の分布記録がある。

3. 生息環境

大きな河川の河口部に近い河川敷や、低地の池沼、養鰻場跡地などの広いヨシ原に生息する。

4. 生息状況

2000 年以前には例数はきわめて少ないながら伊豆、東・中・西部の各地に観察例があった。生態と保護色とから発見しにくい傾向があるが、1 シーズンだけの観察例が多く、個体数は極めて少ないと思われる。2007～2017 年現在、舞阪町の旧養鰻池で継続して越冬が記録されており、年により 1～3 羽生息していたとの情報もある。早い年には 10 月後半に飛来し、4 月に渡去する。なお、2017 年には静岡市駿河区で 1 羽が観察された。

5. 減少の主要因と脅威

生息には魚類や両生類などの餌の豊富な水辺に接した広いヨシ原などの抽水植物群落が必要である。埋め立て（15-1）や過剰な河川改修工事による水辺の植生の破壊（13）が大きな脅威となる。現在 10 年以上継続して越冬している旧養鰻池の環境は水量とアシ原は好ましい状況であるが、周辺が埋め立て（12）やソーラーパネル設置の蚕食が続く中で、存続は不透明である。

6. 保護対策

限定された生息地が私有地であることと周辺の開発状況から、適切な対策は考えられない。

7. 特記事項

特になし。

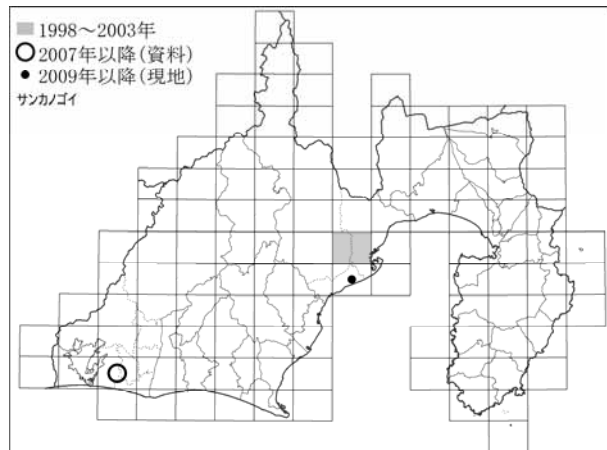
8. 主な文献

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然，（41）： 25-29

（北川捷康）



静岡市駿河区下川原 2017 年 11 月 20 日 小岸順子



ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* (Gmelin, 1789)

サギ科 Ardeidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧 (NT)]

1. 種の解説

全長約 37 cm。日本産サギ類中最も小さい。全身淡茶褐色でほぼ雌雄同色であるが、オスは頭上が黒く、メスには喉から腹にかけて数本の褐色縦斑がある。飛翔時には風切羽の黒色が目立つ。小魚類を主食とするほか、カエル類やエビ類なども捕食する。ヨシの茎を足指でつかみながら伝い歩く。外敵の接近には、嘴を真上に向け首を伸ばしてじっとして、ヨシに紛れる擬態をする。繁殖期には夜間「オーオー」という声で鳴く。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外では東アジアからインドにかけての南アジアに分布する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布し、琉球列島以南で越冬する。県内では磐田市大池などの広いヨシ原のある湿地に分布する。

3. 生息環境

河川、池沼周辺や休耕田などのヨシ、マコモ、ガマなど広い抽水植物に恵まれた環境に生息、繁殖する。

4. 生息状況

もともと個体数は多くないものの、かつては各地の広い抽水植物に恵まれた湿地には生息していた。しかし、浮島ヶ原では開発によるヨシ原の減少が続き、磐田市大池では湛水防除工事の浚渫に絡むヨシ原の広い刈り取りや除去など各地でヨシ原の減少傾向が続いており、現在は多くの地域で生息しなくなるなど生息域が限られ、個体数の減少も憂慮されている。現在、繁殖期に繁殖していると思われる複数個体が観察された（2017.6 中村裕志氏私信）のは磐田市大池だけになったようである。

5. 減少の主要因と脅威

国内的には河川、池沼、水田などの埋め立て、整備、改修など（12、13）によるヨシ原など生息環境の消失、減少が最大の要因であり、それらの環境変化の状況が引続き進行するであろうと予測される。次いで餌の小魚などの供給量の問題もある。磐田市大池では、小鳥のすり餌の原料としてモツゴやタイリクバラタナゴを多量に採捕していた。そのこと自体は問題にならない程度であったが、突然オオクチバスが多数みられるようになった（71）。その後オオクチバスは見られなくなったが、小魚採捕者が来ることなくなり、本種の採餌行動の観察機会も極端に減った。稲の生育期を除く一年の大半を閉鎖的な「ため池状態」としたことによる水質の悪化の影響が大きいと思われる。なお、国外では越冬地における食材としての乱獲（41）の影響があると思われる。

6. 保護対策

広いヨシ原などのある湿地の保存、水質管理が基本である。本種の餌となる小魚を大量に捕食するオオクチバスの生息などの生態系管理も必要である。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

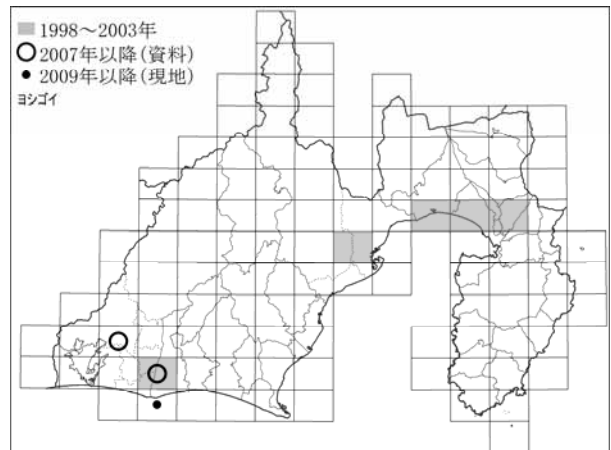
清棲幸保（1978）ヨシゴイ．増補改訂版 日本鳥類大図鑑 III, pp. 936-937. 講談社, 東京.

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然, (41): 25-29

（北川捷康）



磐田市大池 1993 年 10 月 14 日 中村裕志



ミゾゴイ *Gorsachius gorsagi* (Temminck, 1836)

サギ科 Ardeidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

全長約 50 cm。全体に褐色であるが、上面は首の辺りに赤みがあり、他の部分は暗色がかっている。雌雄同色。夏鳥として 4 月中・下旬頃に渡来し、夕闇に包まれるころから一音ずつ区切って「ボッ ボッ ボッ・・・」と低い声で数声から 10 数声続けて鳴く。さえずる時間帯からは夜行性の傾向があるが、繁殖地など暗く深い林中では昼間に採餌する。暗い林の中では保護色になる上、害敵の接近には嘴を上に向けて首を伸ばし、じっとして木の枝に擬態する。サワガニ、魚類、水生昆虫、ミミズなどを餌にする。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外では中国南部、台湾、フィリピン等で越冬する。国内では本州、四国、九州で繁殖し、県内では伊豆・東部・中部にはきわめて少なく、西部地域に偏っている。繁殖地として知られているのは日本だけである。

3. 生息環境

丘陵や低山の、沢のあるよく繁った広葉樹林などの暗い森林を好む。サギ類の中では林中に生息する特異な種である。

4. 生息状況

1980 年頃までは県西部地域においては平地の屋敷林（たとえば旧浜北市東原）や社寺林（たとえば旧浜松市広沢町）などにも広く繁殖していたが、その後 10 年ほどの間に平地での繁殖はほとんど見られなくなり、2000 年頃には丘陵部や低山のごく限られた場所でのしか生息が認められなくなった。急激な減少状況は注目に値する。伊豆・東部・中部においては、もともと生息数は少なかったが、現在ではごく稀な存在となっている。

5. 減少の主要因と脅威

国内的には平地では市街化の進行（23）、水路の改修、農耕地の減少などがあげられ、低山では森林伐採（11）、交通網の拡大（24）、砂防堰（13）の建設などが挙げられる。国外では越冬地のフィリピンなどの森林伐採（11）による生息地の縮小も打撃となっていると考えられる。

6. 保護対策

日本でしか繁殖していない事実から、主な繁殖場所である低山は開発されやすいので、大規模開発事業の事前調査で繁殖が認められた場合には、保全対策に十分配慮されなければならない。

7. 特記事項

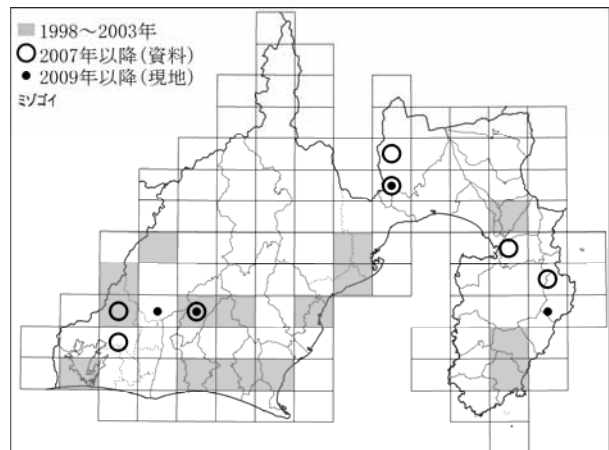
特になし。

8. 主な文献

高野伸二 編（1985）山溪カラー名鑑 日本の野鳥，山と溪谷社，東京，591 pp.



伊東市八幡野 2017 年 4 月 21 日 酒井洋平



（北川捷康）

ササゴイ *Butorides striata* (Linnaeus, 1758)

サギ科 Ardeidae

静岡県カテゴリー：絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②) 変更コード 7

[2004 年版カテゴリー なし：環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 52 cm。雌雄同色。頭部は黒く同色の冠羽が後頸まで伸びている。翼を含めて体のほぼ全体が青灰色をしており、雨覆羽から風切羽が細い白線で縁どられており、笹の葉模様に見えるのが特徴である。虹彩は黄色。採餌は昼間も夜間も行ない、特に夜間には採餌場への往來の飛翔中に「ピョウ」あるいは「キュウ」とよく聞こえる声を一声発する。コロニー以外では群れを作らず、単独で採餌することが多い。主な採餌場は河川で、小魚を主要な餌とするほかカエルなどの両生類や水生昆虫なども餌とする。習性や外見が類似するゴイサギよりやや小さい。成鳥では、ゴイサギは喉から腹が白く、冠羽も白、虹彩が赤いなどの点で区別できる。夏鳥（対象：繁殖地）。



天竜川 1995 年 6 月 24 日 北川捷康

2. 分布

国外ではウスリー地方などの極東から東南アジア・オーストラリア・インドにかけて、及び南米・アフリカ中南部に広く分布する。国内では全国的に記録があるが夏鳥としての繁殖は本州以南であり、奄美諸島以南で越冬する。県内ではかつては東・中・西部及び伊豆地域の水辺に分布した。

3. 生息環境

一級河川を含めて河川が主になるが池沼、水田、海岸でも見られることがある。採餌は開けた水辺を好み河川での採餌が多い。コロニーは河畔林に形成するが公園の大木を利用することもある。

4. 生息状況

もともと個体数は少ない種であった。コロニーは他のサギ類のように複数種で構成することではなく、単独種でしかもせいぜい 10 巣程度の規模であることが多い。天竜川水系、清水区、浮島ヶ原等に数十年来のコロニーが知られていたが、後二者はすでに消滅した。天竜川水系で継続していた 10 巣ほどのコロニーも、1990 年頃から写真撮影者が集中して以後激減し消滅したと思われるが、2017 年に 1 ペアの利用があった。コロニー以外の採餌風景の観察機会も著しく減少したことから、各地ともコロニーが他へ移ったということではなく、個体数が減少したと考えられる。

5. 減少の主要因と脅威

国内的にはレジャー圧 (71) 及び水辺環境の悪化 (13、15-1) がある。国外的には越冬地での捕獲圧 (41) が推測される。

6. 保護対策

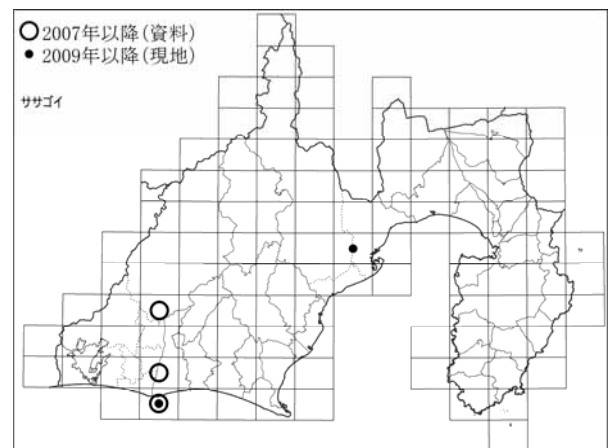
観察・撮影のマナーに対する啓発が必要と考えられるが、それには限界がある。

7. 特記事項

特になし。

8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量などに係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29
(北川捷康)



ツルシギ *Tringa erythropus* (Pallas, 1764)

シギ科 Scolopacidae

静岡県カテゴリー：絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

全長約 32 cm。雌雄同色。夏羽は頭部から胸・腹部がすすけた黒色で、白いアイリングが目立つ。冬羽は下面が白く頭から背面が灰褐色になる。嘴は細くて長い。脚も長めで秋冬は赤くなる。飛ぶと背から腰が白い。水生昆虫の幼虫などやミミズ、小ガニなども餌にする。「チュイッ」と鋭い声で鳴く。本種の冬羽は脚が赤いアカアシシギに似るが、アカアシシギは嘴の基部が上・下嘴ともに赤みがあり、飛ぶと次列風切羽が白いことで区別できる。旅鳥（対象：生息地）。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸の極北部で繁殖しアフリカ中央部や南アジア・地中海沿岸で局所的に越冬する。国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。本州以南ではごく少数が越冬する。県内では内陸湿地の多い西部地域の休耕田、池畔などに飛来する。

3. 生息環境

水田、休耕田、池沼畔、ハス田、干潟などの内陸湿地に生息する。

4. 生息状況

春秋に旅鳥として各地の水田に渡来していた。早いものは 2 月下旬に渡来し始め、5 月に入ると全身黒い夏羽の装いを見せていた。春に多い傾向があり、他のシギ類に先駆けて渡来していたが、1979 年 5 月浜松市村楠 16 羽以後、1990 年 4 月磐田市大池 7 羽、1991 年 4 月浜松市篠原 4 羽（いずれも筆者）を最後に春期の夏羽の姿は見られなくなった。それは 1980 年ごろから進んだ圃場整備により、冬にも水のあった水田が乾田化されたからである。現在では秋季に磐田市大池、浅羽町休耕田、天竜川河口等に 1~3 羽程度が飛来し、大池では時に 1 羽の越冬が見られるという状況である。

5. 減少の主要因と脅威

主要因は高度経済成長期から続く湿地の埋立て（15-1）と 1980 年頃から進んだ圃場整備による乾田化（15-2）の結果、最も重要な採餌場が失われたことである。

6. 保護対策

各地で実施され始めた「冬水田んぼ」の広がりには期待はしたいが、現状はあまりに小規模に過ぎるか。

7. 特記事項

筆者は東京湾奥で 1963 年 5 月 3 日に 450 羽をカウントした。同じ太平洋側にこのように多数生息していたが、その数年後に同所で埋立てが始まり、ディズニールランドができた。この高度経済成長期の各地の湿地の埋め立てに続く圃場整備で、本県では 25 年以上前から主な春の飛来が絶えていたのに、環境省のレッドデータブックへの記載は 2014 年版を待たねばならなかった。太平洋側の埋め立てや圃場整備が先に進み、遅れた日本海側との間に減少率のズレが生じていたからと推測した。全国のモニタリング調査の結果を用いた研究では、春期の推定変化率は 30 年前比-88.2%で、いかに全国的に減少したかは明らかである。

8. 主な文献

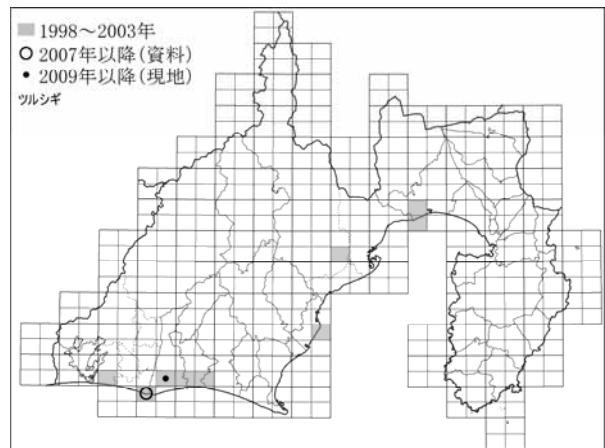
北川捷康（1967）新浜附近（千葉県）の鳥類 “ふたまた” (2): 50-80.

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

守屋年史（2014）ツルシギ レッドデータブック 2014 2 鳥類 日本の絶滅のおそれのある野生生物 環境省編 : 172-173. (北川捷康)



浜松市村楠 1979 年 5 月 5 日 北川捷康



静岡県カテゴリー：絶滅危惧 B 類(EN) (要件①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

全長約 26 cm。雌雄同色。成鳥夏羽は頭上から後頸が黒く額は白い。上面は淡青灰色で下面は白い。嘴は黄色く先端が黒い。脚は橙色をしている。水面上数 m でホバリングしながら餌の小魚などに狙いをつけ、水中に飛び込んでくわえ捕る。繁殖期には広い裸地に多数が集まりコロニーを形成する。夏鳥(対象:生息地)。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸からヨーロッパ、北アフリカ、北アメリカ、オーストラリアで、国内では本州、四国、九州、琉球列島で繁殖する。一級河川における大規模なコロニー形成は静岡県のみであり、現在も繁殖し続けているのは天竜川だけである。

3. 生息環境

大河川の砂利の中州や埋立地、海岸の広い砂浜に集団でコロニーを形成する。裸地を好み、丈が低くても広く草が生えているような環境は忌避する。

4. 生息状況

2000 年以前には、東海型一級河川の中州や河口砂嘴、海岸の砂浜など広い範囲で多数繁殖していたが、やせ細った海岸砂浜では、小規模なコロニーすら繁殖不能になった。最近 5 年間で数百羽規模のコロニーが形成されたのは天竜川、安倍川、太田川河口砂嘴に限られ、毎年繁殖が行われているのは天竜川だけである。繁殖の長い歴史があった富士川では 2007 年を最後に繁殖しなくなったという(渡邊修治氏私信)。

5. 減少の主要因と脅威

天竜川では県内 3 つのダムに伴う砂利の供給遮断、過度の砂利採取により、中州の貧弱化及び河床の低下が進んだ(13)。その結果、梅雨期の冠水による卵及びヒナの流失(55)が恒例化している。また、ダム貯水に伴う恒常的な流量の低下は中州の植生遷移(54)を進め、ヤナギの樹林化が中州を含む下流全域で進んだ(54)。自然状態での安全な営巣場所は県全域で失われた。さらに、四駆車走行などのレジャー圧(71)及びカラス・チョウゲンボウなど天敵によるヒナの捕食(52-4)もコロニー壊滅の主要因である。

6. 保護対策

冠水の阻害を受けても海岸砂浜より天竜川の中州を繁殖場所を選ぶという本種の生態特性がある。天竜川では、周囲を水に囲まれた冠水しにくい裸地の中州を造成することが最適な対策である。静岡県渡り鳥研究会及び地球環境と自然を愛する会が協力し、重機を用いた嵩上げ造成などにより、繁殖が支えられてきた経緯がある。河川行政の三本柱の一つ「環境」の面からの行政の積極的な対応が望まれる。

7. 特記事項

標識調査により天竜川と越冬地のオーストラリア南東部との往復 16,300km 余の往来を確認した。天竜川は 1994 年には営巣数全国一であった(環境省「全国コアジサシ定点調査」)。

8. 主な文献

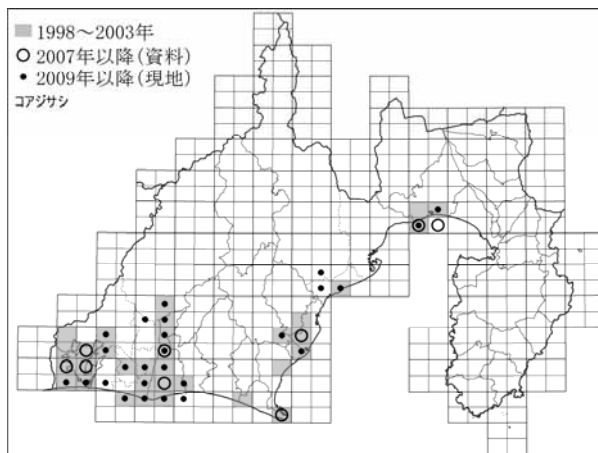
北川捷康(1995) 天竜川下流部の鳥たち. 国土交通省浜松工事事務所 : 8-9

北川捷康(2011) 一級河川天竜川の下流中州におけるコアジサシの繁殖戦略とその破綻-40 年の繁殖の歴史から見たこと-. 日本鳥学会 2011 年度大会 講演要旨集 B35, : 110

(北川捷康)



天竜川 2007 年 7 月 12 日 北川捷康



オジロワシ *Haliaeetus albicilla* (Linnaeus, 1758)

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②)変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

全長はオスが約 82 cm、メスが約 92 cm でオスよりメスの方が大きい。翼開長は大型個体では 220 cm を超える。雌雄同色。成長は全身褐色で頭部はクリーム色がかかり、下方へ行くほど濃い褐色になる。尾は白く、嘴は黄色い。若い個体は尾に褐色が混じり、嘴も黒い。トビよりずっと大きく、開いた翼の前後の幅が広い。そのために尾が短く見える。主な餌は魚類だが、カモ類やカモメ類なども捕食する。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外ではヨーロッパから極東ロシアのカムチャツカまで広く分布する。国内では北海道で少数が繁殖するが、冬鳥として本州以南にも渡来する。県内では大河川の河口部には不定期に 1 羽程度が飛来していたが、天竜川だけは長年複数個体が越冬していた。関東以西の太平洋側の河川で毎年複数個体が越冬していたのは県内外を問わず天竜川だけであった。

3. 生息環境

大きな河川、湖沼などに生息するが、主な餌になる数 10 cm の魚が常に供給されることが必要条件になる。

4. 生息状況

1970 年代には西部地域の天竜川を中心に浜名湖、太田川などの広い範囲に 5 羽以上が生息していた。その当時はミサゴが捕らえた大きなボラと思われる魚を 2 羽の本種が挟み込むように襲い、取り落とした魚を空中でさらいとるという生態を見ることもできた。その後次第に生息範囲を狭め、天竜川周辺に限られてきた。その天竜川でも下流域では 2008~2009 年に磐田市句坂付近の記録 (今井敦氏私信) が最後と思われる。これは天竜川河口左岸の 5 本の大規模風車の建設時期に対応している。その後は 2010~2011 年に佐久間ダムで観察されている (国土交通省浜松河川国道事務所による天竜川ダム再編事業の調査に関する聞き取りにて)。今後は大河川で稀に不規則な渡来がある程度と推測される。

5. 減少の主要因と脅威

コアジサシの項でも触れたが天竜川の下流域では植生遷移が進み中州までヤナギの林になるなど、見通しが悪くなり、安心できる休息場所も失われた (54) ことが、警戒心の強い大型の猛禽にとって安住を脅かす要因になったと思われる。全国的には狩猟に使われる鉛の散弾や化学物質が食物連鎖を経てオジロワシの体内に蓄積された (32) 影響も大であろう。ただしこの件については、現在北海道ではすべての狩猟の鉛ライフル弾及び鉛散弾使用を禁じている。

6. 保護対策

天竜川の低水路や中州のヤナギ林の伐採管理は、河川の裸地を利用する生物はもとより、流量管理上も必要なことと思われる (53)。

7. 特記事項

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種 (平成 5 年)、文化財保護法に基づく国の天然記念物 (昭和 45 年)。

8. 主な文献

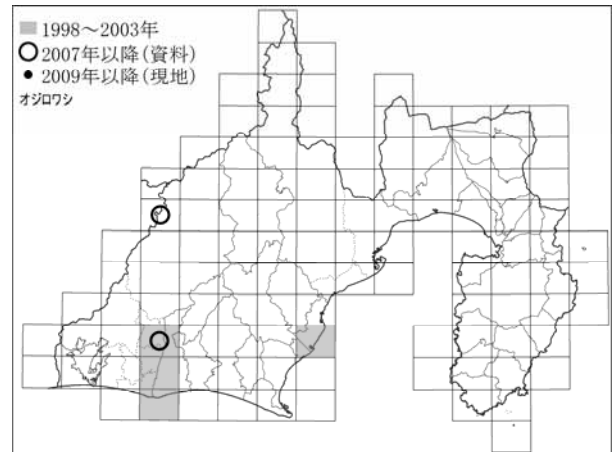
北川捷康 (1998) 浜北市の野鳥 浜北市・浜北市教育委員会 : 13

北川捷康 (2005) 竜洋町の鳥たち 竜洋町教育委員会 : 30

(北川捷康)



磐田市句坂 1995 年 2 月 24 日 北川捷康



チュウヒ *Circus spilonotus* Kaup, 1847

タカ科 Accipitridae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN)]

1. 種の解説

全長オス約 48 cm、メス約 58 cm。オスよりメスの方が大きい。雌雄、成・幼鳥で個体による羽色の変異が多様である。メスと幼鳥は基本的には全身褐色をしている。オスの成鳥の代表的な個体は上面が灰色に黒色のまだら模様があり下面が白いが、メスのように褐色のものもある。ヨシ原などの上を、翼を逆への字型に保って滑空したり羽ばたきながら餌となるネズミや両生類、鳥類などを探す。越冬期、昼間は単独で行動するが、日没後にばらばらに集まり、数羽が同じ場所にねぐらをとる習性がある。休むのは地上や草の上が普通で、高い立木に止まることはない。冬鳥（対象：越冬地・ねぐら）。

2. 分布

国外ではモンゴル、中国北東部、ウスリーにかけて繁殖し、中国南部から東南アジアにかけて越冬する。国内では北海道と本州の一部で繁殖し、繁殖数は約 90 つがいと推測されている。静岡県には冬鳥として渡来し、かつては浮島ヶ原、富士川河口などで姿が見られたが、現在では越冬期を通じて生息するのは天竜川・太田川付近と浜名湖畔の一部だけとなった。

3. 生息環境

広いヨシ原のあるような湿地や埋立地の草生地を好んで生息する。冬期にはその地域に生息するものが一ヶ所に集まってねぐらをとる習性がある。ねぐらにはヨシ原を利用するのが普通である。

4. 生息状況

渡りの時期に単発的に姿を見せる場所はあるが、定期的な越冬地は西部地域だけで、その数も一桁にすぎない。1980 年代まで天竜川河口右岸の松島湿地のヨシ原が県内のねぐらとして唯一知られていたが、環境の悪化で掛塚橋右岸下流のメダケ群落に移り、そこも 2002～2003 年にかけて低水路横の砂利採取工事により利用しなくなった。その後、浜名湖畔の養鰻池跡地のヨシ原で 10 羽弱の利用が続いたが、次第に数を減じて 2017 年の利用は認められなかった。天竜川筋では、ごく少数が利用している。

5. 減少の主要因と脅威

餌場になるヨシ原のある湿地や草生地の開発（13, 15-1, 16）や植生遷移（54）による採餌地やねぐらの消滅が主な要因である。外傷のない死体が回収されたことから食物連鎖による殺鼠剤などの影響（32）が憂慮されている。

6. 保護対策

生息が確認されている地域のヨシ原やねぐら環境の保存が必要である。

7. 特記事項

ねぐらにメダケの群落を利用する例は全国的に見て他にない特異な例と思われる。

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種（平成 29 年）。

8. 主な文献

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然，（41）： 25-29

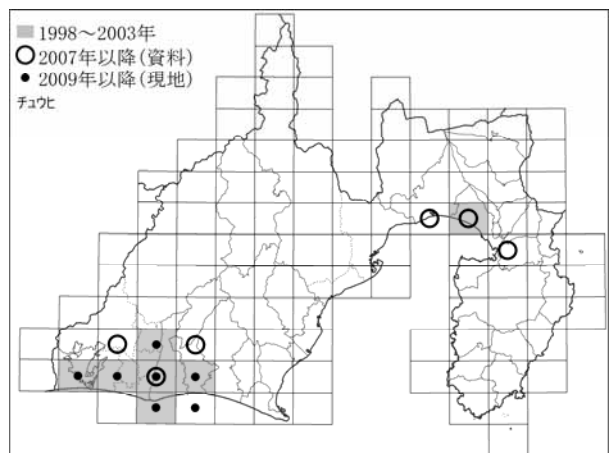
北川捷康（2005）チュウヒ．竜洋町の鳥たち 竜洋町教育委員会： 32

中川富雄（2014）チュウヒ．環境省 編，レッドデータブック 2014 2 鳥類： 98-99

（北川捷康）



富士川河口 2007 年 9 月 25 日 渡邊修治



コノハズク *Otus sunia* (Hodgson, 1836)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件①②)変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 20 cm。日本産最小のフクロウ。頭部から背面が灰褐色をしている褐色型と赤さび色をした赤色型の 2 タイプがある。よく茂った暗い林の中ではよい保護色になる。雌雄同色。虹彩は黄色で、類似するオオコノハズクは赤橙色なので区別できる。夜行性であるが、繁殖期には昼間でも「ブッポッソー」と聞こえる声でさえざることがある。餌はコガネムシ、ガ、バッタなどの昆虫類を主食にする。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外ではパキスタン北部から東南アジア、中国からシベリア南東部にかけて繁殖する。国内では夏鳥として北海道から九州まで繁殖する。県内では標高 1,000 m 前後～2,000 m 以下の山地に局所的に分布する。

3. 生息環境

大径木の落葉広葉樹があり、餌とする昆虫類を多数生産する広い林で繁殖する。営巣は樹洞を利用する。

4. 生息状況

1980 年代までは天竜川、大井川、安倍川の上流及び愛鷹山などの広い落葉広葉樹林に生息していたが、今回の調査期間内には、大井川奥の畑薙第二ダム付近以北の 3 ヶ所でさえざり聞いたばかりにとどまった。秋の渡りの時期に磐田市桶ヶ谷沼において標識調査で記録されたことがあり、平地を通過するものもある。

5. 減少の主要因と脅威

過去に行われた植林などのためのブナ林の伐採 (11) の影響は大きいと思われる。伐採が行われていない標高 1,000 m を超える広葉樹林、たとえば西部地域では、スーパー林道奥の門桁山の野鳥の森や麻布山、あるいは蕎麦粒山などでは大径木のブナやミズナラが 1980 年頃から多数枯れたり倒れた状況 (55) を見ている。少なくとも大径木の樹洞を利用している営巣環境の悪化は否めない。

6. 保護対策

生息環境の植物の問題か、餌生物の昆虫の問題なのか、温暖化の影響なのか原因が判然とせず、残念ながら巣箱かけ以外に実施可能な対策があげられない状況である。

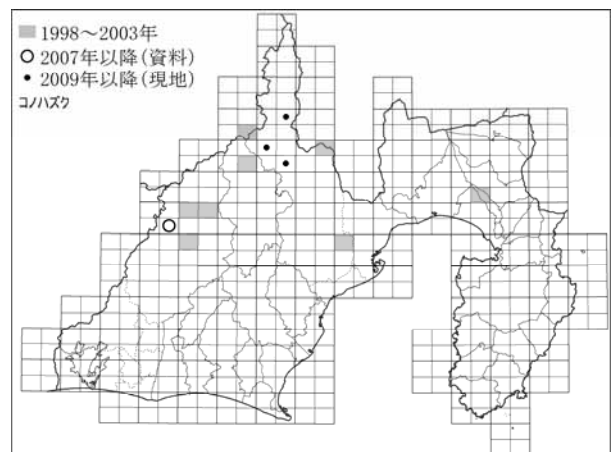
7. 特記事項

環境省は現在もレッドリストに入れていない。東北地方では果樹園で繁殖していることが知られ、北海道の津軽海峡に突き出た白神岬で組織的に行われている標識調査では毎年の秋の渡りで、本種の標識数が 2010 年-67 羽、2011-139、2012-8、2013-36、2014-82、2015-29 という状況であることから北海道を基準として危機的状況とは見ていないと推測される。しかし、隣県の愛知県でも本種の生息地として有名な鳳来寺山ではすでに絶えて久しい。ブッポウソウやアオバズクなどと「繁殖に樹洞を利用」し「昆虫を主食」とする「夏鳥」と共通の習性を持つ仲間が軒並み個体数、生息地を減少させていることは、中部地方としての共通の要因があると思われる。

8. 主な文献

財団法人 山階鳥類研究所 (2012) 松前白神 2 級ステーション日別放鳥一覧。平成 23 年度 環境省委託業務 2010 年鳥類標識調査報告書 (鳥類観測ステーション運営), 財団法人 山階鳥類研究所, 我孫子市。
: 81-83 (北川捷康)

NO IMAGE



コミミズク *Asio flammeus* (Pontoppidan, 1763)

フクロウ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 38 cm。全身淡黄褐色で、褐色の斑がある。夕方から採餌活動に入る。主にネズミを餌にするが鳥類も好んで捕食するようである。耳のように見える羽角は 2 cm と短く、虹彩は黄色である。よく似たトラフズクは羽角が 4~5 cm、虹彩が橙色であるのが識別点になる。地上で休むことが多い。冬鳥 (対象: 越冬地)。

2. 分布

国外ではユーラシア大陸から北米大陸北部に広く繁殖し、冬は南へ渡る。国内では北海道から琉球諸島まで冬鳥として生息する。県内では冬鳥として伊豆・東部・西部などで記録されているが、観察機会はきわめて少ない。

3. 生息環境

河川敷や湿地、農耕地、丈のあまり高くない草地などに生息する。

4. 生息状況

1990 年代には天竜川、磐田市大池、太田川、大井川、静岡市麻機、朝霧高原、浮島ヶ原など東・中・西部地域それぞれに複数メッシュ、全 10 メッシュ以上で記録されていたが、静岡県レッドデータブック (2004) 調査時には 6 メッシュであった。今回の調査でも 6 メッシュであったが、越冬期に記録されたのは 2014 年冬の朝霧高原のみで、天竜川河口、太田川河川敷、浮島ヶ原、伊東市池などの 5 メッシュはすべて渡り期のもので、越冬地として利用されたかは不明である。

5. 減少の主要因と脅威

河川敷や堤防法面などの植生遷移 (53、54) 及び広い草原や湿原の減少 (15-1、16) 等があげられる。

6. 保護対策

河川管理に関して、採餌場となる河川敷や堤防法面の植生の管理が求められる。

7. 特記事項

一級河川の中州、一級・二級両河川の高水敷及び高水敷から低水路にかけての法面を中心とした植生遷移は、異常である。ヤナギ林・竹林あるいは草地とはいえクズやアレチウリに覆われているのは、採餌場所としての機能は完全に失われている。この状況から影響を受けるのは本種だけではなく、多くの猛禽類に共通した問題である。人や車を水辺へ行かせない河川行政が進められていることと無縁ではない。かつて「よい子は川で遊ばない」に始まり、現在では多くの河川で水辺へ行くには管理する事務所の許可を得て車止めの鍵を借りなければならず、堤防から車止めのカギを外して駐車場などにおりたのはよいが、その先は 1 m を超すやぶに囲まれていて川へ行けなかったところもある。かつて少なくとも二級河川はどこからでも水辺へおりられた。コンクリート護岸になり、各所に階段が設けられた。階段自体も数 m 幅のコンクリートであるにもかかわらず、現在その何ヶ所がクズに覆われずに機能しているだろうか。

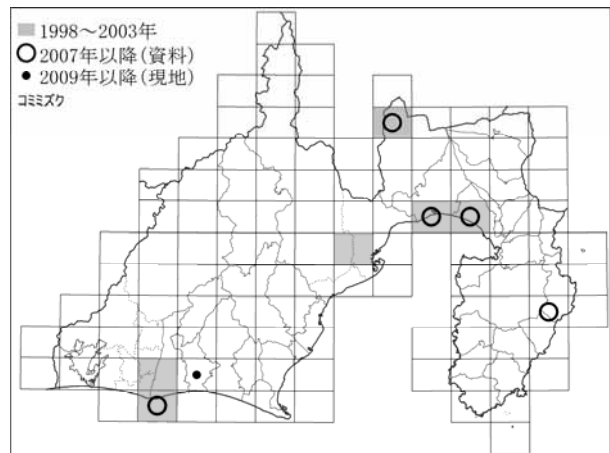
8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説 (p72) の引用文献に挙げたものを利用した。

(北川捷康)



沼津市原浮島ヶ原 2012 年 1 月 22 日 渡邊修治



ヤマセミ *Megaceryle lugubris* (Temminck, 1834)

カワセミ科 Alcedinidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①②) 変更コード 6

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU) : 環境省カテゴリー なし]

1. 種の解説

全長約 38 cm。日本に生息するカワセミ類で最大。体の上面は白と黒のまだら模様で下面は白い。頭の羽は長く冠羽状。雌雄ほぼ同色だがオスの胸には橙色の斑があり、メスにはない。オスの翼下面は白色でメスは橙色をしている。水中を泳ぐアユ、アマゴ、ウグイ、オイカワなど主に魚類を枝から飛び込んで捕食する。人に対する警戒心が強い。留鳥（対象：生息地）。

2. 分布

国外ではヒマラヤ、ミャンマー、ラオス、ベトナム北部、中国雲南省などに分布する。国内では本州、四国、九州に分布し、北海道には亜種エゾヤマセミ *M. l. pallida* が分布する。県内では山間地の河川などに分布する。



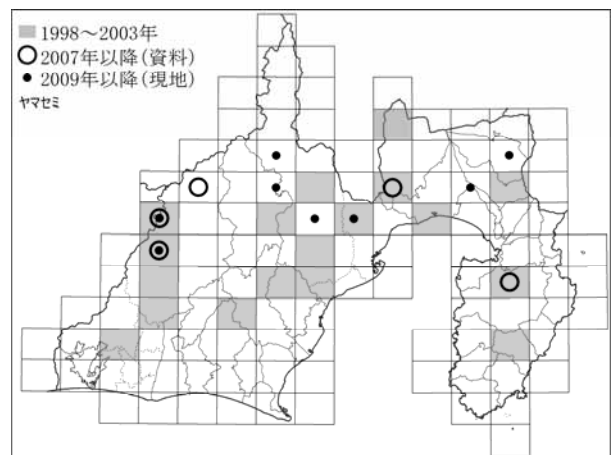
©2019 S. Watanabe
富士宮市芝川町 2011 年 12 月 20 日 渡邊修治

3. 生息環境

河川の中流から上流、ダム湖などの水辺に生息する。生息地に近い土や砂地の崖や土手に直径約 10 cm、奥行き約 1 m の横穴を掘って営巣する。

4. 生息状況

1980 年代には県内各地の河川に広く生息していた。1990 年代前半の西部地域では、天竜川の飛竜大橋東の磐田市神田・敷地、浜松市浜北区宮口の蛭沢奥池付近の崖地など平地と丘陵部の境付近に営巣していた。その後上流部への後退が続き、現在では秋葉ダム湖から上流でないと生息しなくなった。この傾向は県内全域でみられ、個体数も著しく減少している。分布図で新旧の記録を見比べると、伊東市の 1 例をのぞいて、全域で北緯 35 度 0 分以北に後退していることがわかる。



5. 減少の主要因と脅威

1970～80 年代には船明ダム付近や敷地の獅子鼻公園などの道路脇の手の届く場所に巣穴を掘って営巣していたが、その巣穴を大人の靴大の石で塞いであるものを 2 例見ている。1 例は石を除けると本種の親が飛び出してきた。もう 1 例は飛び出してこなかったもので、中で死んでいるものと思われた。このようなたずらの対象になるほど一般的であったが、1990 年代には高い崖の上の方にしか営巣しなくなった。さらに生息河川の護岸改修 (13) や川辺の林の伐採 (11)、また林道の崖への崩落防止のコンクリート吹付や金網張りなど (24) による営巣適地の減少が主要因と考えられる。なお、本種の減少と餌資源が競合するカワウの山間地への進出の時期が似ており、因果関係については今後の研究課題である。

6. 保護対策

近年の著しい減少を考慮し、河川上流域の生息環境と営巣に必要な土崖の保全対策が必要と考えられる。

7. 特記事項

県内でも減少の著しい伊豆では、2000 年以降つがいの観察例はない。

8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(酒井洋平・北川捷康)

1. 種の解説

全長約 18 cm。横から見ると頭部は褐色、眉斑は黄白色でその下に黒く太い過眼線がある。喉から胸と脇腹は黄白色で、腹の中央から下尾筒にかけては赤い。背面から肩の羽、三列風切羽は緑色。尾羽は黒色で腰と上尾筒及び尾羽先端はコバルト色。初列風切羽の基部には白斑があり、飛ぶとよく目立つ。雌雄同色。雌雄ともに「ホホヘン」と聞こえる尻上がりの声を二度繰り返してさえずる。餌としてカミキリなどの昆虫類やサワガニ、ムカデなどを食すが、育雛中の親鳥はミミズを最も多く運んでいた。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

日本に生息する亜種は、国外では朝鮮半島及び中国、台湾にかけて繁殖する。国内では本州中部以南で繁殖する。県内では迷鳥として伊豆・東・中・西部各地でいくつかの渡来記録があった。2003 年に西部で繁殖が確認されて以後、中・西部での記録が増えている。

3. 生息環境

過去の県外における生息環境は常緑広葉樹林とされていた。県内で同様の例は少なく、低山の落葉広葉樹の混ざったスギなどの針葉樹の植林地で、沢や急傾斜地のあるような場所を好んで生息・繁殖する。

4. 生息状況

2005 年以前の記録は少なく、年度も場所もまちまちで、既知の繁殖も 1 例であった。しかし、今回の本調査において複数年渡来の繁殖地を含む 6 ヶ所の記録があった。このうち 5 例が中部地域の記録である。なお、これらから現時点における本種の飛来数が増加していることは明らかである。

5. 減少の主要因と脅威

生息密度が高かった宮崎県での個体数の減少が著しいなど、現在継続して生息している地域は四国の一部と本州中西部の一部のみである。国外の状況では、繁殖する中国、台湾では最近の確実な記録がほとんどなく、全土で生息が確認されていた台湾での生息数が大きく減少しているという。越冬地を含めた熱帯及び温帯地域の伐採による森林面積の減少（11）が憂慮されている。

6. 保護対策

かつて繁殖場所が知られ、全国から多数の写真撮影者が集まり、本種の繁殖も危惧されたばかりでなく地域の住民にも多大な迷惑をかけた事例が県内であった。アセスメントなどでの記録に関しても、情報管理は徹底するべきである。

7. 特記事項

「5. 減少の主要因と脅威」で記したことを踏まえて静岡県の生息・繁殖記録の増加を考えると、生息域がやや北へシフトしているという状況が推測できる。静岡県の現況がこのまま続くかどうかは即断できないが、県内の生息状況が把握できたと判断しカテゴリーの変更をした。

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種（平成 5 年）。

8. 主な文献

中村滝男・金井 裕（2014）ヤイロチョウ．環境省 編，レッドデータブック 2014 2 鳥類：116-117（北川捷康）



静岡県 2017 年 6 月 鳥類部会提供



サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles, 1822)

サンショウクイ科 Strigidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-①) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 I B 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 II 類 (VU)]

1. 種の解説

全長約 20 cm。背は灰色で下面が白いスマートな体型の小鳥。雌雄ともに背面が灰青色をしている。オスは額が広く白く、頭頂から後頸が黒い。メスは頭頂から後頸が灰色である。鳴き声は「ヒリリ」あるいは「ジリリ」と聞こえる。夏鳥として 4 月下旬から 5 月中旬にかけて渡来する。近年北上して県内にも生息するようになった別亜種のリュウキュウサンショウクイ *P. d. tegimae* は、額の白色部が狭く、胸が灰茶色に汚れた感じで、背面はオスではかなり黒く、メスではかなり暗色である。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外ではアムール川下流域、ウスリー、マンチョウリから朝鮮半島の付け根にかけて繁殖し、インドシナ半島からフィリピン、ボルネオ、スマトラにかけて越冬する。国内では本州、四国、九州に分布する。県内全域で減少したが、西部寄りにやや多く分布する。

3. 生息環境

丘陵地や低山の落葉広葉樹林に生息する。標高 1,000 m 以上の山地でも繁殖期に観察されているが、繁殖は確認されていないようである。

4. 生息状況

西部地域においては、1980 年代前半までは繁殖終了後から渡り前の 8 月には 20～30 羽の群れをよく見かけたが、1980 年代後半からはまったく見られなくなった。県内各地で減少していたが、ここ数年復活傾向にある。この減少と復活傾向の県内的な要因は不可解である。

亜種リュウキュウサンショウクイが東上傾向にあり、ここ数年の間に伊豆地域で急増し、周年生息するようになった。繁殖は確認されていないようだが、かつて亜種サンショウクイが普通にいたところに見られた繁殖後の集団行動が亜種リュウキュウサンショウクイで見られるようになっている（2015. 10. 3, 21 羽, 伊豆市, 酒井洋平氏観察）。亜種サンショウクイの復活傾向が亜種リュウキュウサンショウクイの県内侵入と増加の動きに連動しているように見えるが、今のところ関連があるのかどうかは不明である。

5. 減少の主要因と脅威

エネルギー革命以後薪炭林の保存活用が低迷し、次第に常緑広葉樹林が増えてきたが、従来生息していた丘陵から低山にかけての落葉広葉樹林の林そのものは残っていても生息が認められない地域が広がっていた。この状況は全国的に共通していたようである。国内での減少の原因は明らかではないが、越冬地の森林伐採などの環境問題（11）が影響していたのではないかと推測された。

6. 保護対策

特になし。

7. 特記事項

特になし。

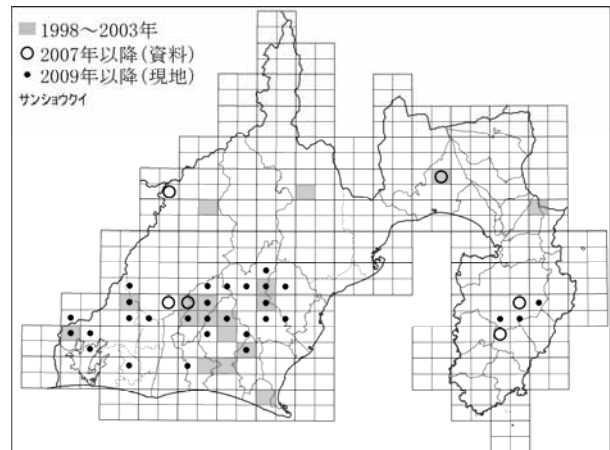
8. 主な文献

基本的な事項については、分類群の解説（p72）の引用文献に挙げたものを利用した。

（北川捷康）



周智郡森町 2002 年 6 月 19 日 北川捷康



オオセッカ *Locustella pryeri* (Seeböhm, 1884)

センニュウ科 Locustellidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 B 類(EN) (要件-②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN)]

1. 種の解説

全長約 13 cm でスズメより小さい。上面は尾羽まで茶褐色で、頭頂から背にかけて黒い縦斑がある。眉斑は不明瞭。腮から下面中央部は白い。雌雄同色。春の渡去前には「ジुकジुकジुक…」と数回から 10 回ほど連続して鳴くので、存在を認めやすい。主として昆虫類を餌にする。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外では中国東北部及びロシアの日本海沿岸の一部で局所的に繁殖する。国内では青森、秋田、茨城、千葉などで局所的に繁殖し、冬には本州中・南西部、四国などにも生息する。県内では東・中・西部で少数の記録があるが、最近 10 年ほどでは西部の記録がやや多い。なお、中国東北部及びロシアの日本海沿岸の一部に分布するのは別亜種オナガオオセッカ *L. p. sinensis* で、亜種オオセッカ *L. p. pryeri* は日本の固有亜種とされる。

3. 生息環境

河川敷や池沼のヨシ原や草丈の低いイネ科、イグサ科などの生育する湿った草地に生息する。

4. 生息状況

西部、東部の河川敷・耕作地・池沼の草地で観察あるいは標識調査で確認されているがきわめて少ない。越冬期には草むらから出ることがほとんどないために目視による観察機会は少なく、標識調査か渡去前のさえずりによる確認例が多い。

5. 減少の主要因と脅威

河川敷やその他の湿地は造成が行われやすい（13、15-1）うえに植生遷移（54）、水位の増減や土砂堆積に見舞われる（55）。耕作地周辺の草地も圃場整備（15-2）などの影響を受けやすい。

6. 保護対策

河川敷や湿地の造成や圃場整備には、草地の構成や本種の生息の有無など、精査が必要である。

7. 特記事項

東部の湿地では、繁殖地の茨城県鹿島郡神栖町からの渡来が標識調査により確認されている（神谷）。古い記録であるが、4 月 12 日に浮島ヶ原で採集したオス 1 羽の解剖結果から繁殖の可能性ありと報告されている（黒田，1937）。しかし、筆者は西部の複数の場所で渡去前のさえずりをしばしば聞いており、4 月 11 日の記録もある。このことから、黒田の記録は渡去前の可能性がある。

種の保存法に基づく国内希少野生動植物種（平成 5 年）。

8. 主な文献

黒田長禮（1937）オオセツカの新分布地．鳥，9(44)：343

財団法人 山階鳥類研究所標識研究室（1992）(2) 注目値する回収例 10 オオセツカ．環境庁委託調査 平成 3 年度鳥類観測ステーション報告，p. 22．財団法人 山階鳥類研究所，我孫子市。

北川捷康（2012）桶ヶ谷沼の鳥類生息調査-平成 23(2011)年度-．：3

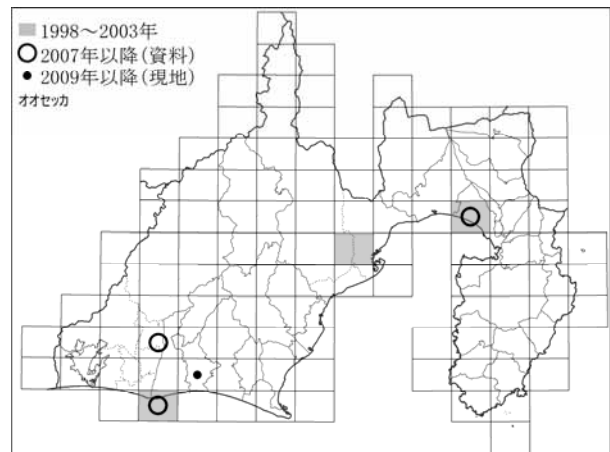
平野敏明（2015）渡良瀬遊水地における繁殖期のオオセツカの生息状況の変化と生息環境．Bird Research，11：A1-A8

北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然，(41)：25-29

（北川捷康）



磐田市（標識調査） 2008 年 11 月 13 日 北川捷康



ライチョウ *Lagopus muta* (Montin, 1781)

キジ科 Phasianidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー: 絶滅危惧ⅠB 類 (EN)]

1. 種の解説

全長約 37 cm。体形はニワトリ型。春から秋にかけては雌雄で差はあるが、白・黒・茶の斑模様で、冬期は尾羽をのぞいてほぼ全身真っ白に換羽する。目の上に皮膚の赤い部分があり、オスは繁殖前になると大きく膨らみ、目立つ肉冠となる。繁殖期の産卵後の抱卵・育雛はすべてメスが担当し、オスは抱卵期まで見張り役の任に当たる。日中は猛禽類などの天敵の目を避けハイマツ群落を利用することが多いが、早朝や夕方、ガスや雨などの悪天候時には開けた場所に出て採食する。高山植物及び矮生常緑低木の芽・葉・花・漿果・種子や昆虫類を餌とする。留鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外では種ライチョウが北半球の北極を取り巻く地域に広く分布する。国内に生息する亜種ライチョウ *L. m. japonicus* は最終氷期に大陸から移り住んだものとされており、本州中部の頸城山塊・北アルプス・乗鞍山・御嶽山・南アルプスの高山にのみ生息する。県内では南アルプスに生息し、イザルガ岳が本種の繁殖分布の南限にあたる。なお、南アルプスは他地域とは異なる遺伝集団であることが確認されている。

3. 生息環境

南アルプスでは標高 2,600 m 以上のハイマツ群落が繁殖場所であり、天敵から身を隠す場所として必要不可欠である。繁殖期はハイマツ群落とその周辺のガンコウランなどの矮生常緑低木群落が生息環境である。

4. 生息状況

県内では南アルプスのハイマツが分布する主稜線沿いに生息する。南限のイザルガ岳では現在 1 ペアのみが生息するが、北へ行くほど生息個体数は多くなる傾向にあるという。積雪の多い地域では冬期に森林限界付近まで下るといえるが、県内の南限生息地における厳冬期の生息場所は明らかになっていない。

5. 減少の主要因と脅威

猛禽類のイヌワシ、チョウゲンボウなどのほかに、近年高山帯に進出した哺乳類による捕食（52-4）がある。シカによる高山植生の食害（54）や温暖化による生息環境の縮小（71）なども挙げられている。温暖化は、分布周縁の南端部に当たる本県のライチョウが最も早く影響を受ける可能性も考えられる。

6. 保護対策

他県では、人工増殖（生息域外保全）のほかに、2015 年から開始された生息域内保全の取組（死亡率が著しく高い孵化直後のヒナをメス親とともに 1 カ月間ケージで保護）があり、現在は有効性の検証と実験段階にある。本県では縄張り期におけるつがい数の経過観察が、まずは必要と考えられる。

7. 特記事項

本県では、上記減少の主要因を裏付ける確認は得られていないものの、南限分布地におけるなわばり数の減少が懸念されており、注意が必要である。種の保存法に基づく国内希少野生動植物種（平成 5 年）。文化財保護法に基づく国の特別天然記念物（昭和 30 年）。

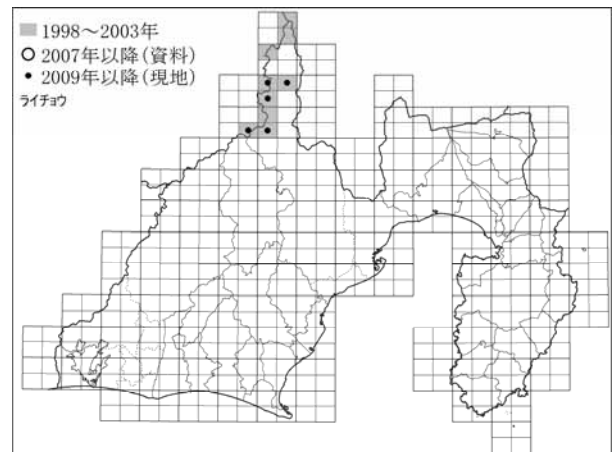
8. 主な文献

朝倉俊治・増田章二・近藤多美子・堀田昌伸（2011）南アルプス南部（赤石山脈）におけるライチョウ *Lagopus mutus japonicus* の標識調査。日本標識研究会誌，23：47-54

（北川捷康・近藤多美子）



南アルプス荒川岳 2010 年 8 月 3 日 北川捷康



1. 種の解説

全長約 20 cm。雌雄ほぼ同色。全身黄土色で黒褐色の斑模様があり、淡黄色の眉斑がある。背面、胸、脇腹に後端がとがった縦斑が目立つ。オスは頬から喉にかけて赤茶色をしている。人の気配には敏感で、畔や草むらにじっとうずくまるので見つけにくい。越冬期には小群でいることが多い。渡去前の 3 月末から 4 月初めにはよくさえずる。声は「アジャパー」と聞きなされている。イネ科やタデ科など多種類の植物の種子やゴミムシ、チョウの幼虫、ケラなどの昆虫類、クモ類を餌とする。外来種のコジケイより二回り小さい。冬鳥(対象:生息地)。

2. 分布

国外ではモンゴル北部からロシア極東のアムール、ウスリー地方、サハリン、中国北東部で繁殖し、朝鮮半島、中国南部、インドシナで越冬する。国内では、本州北部以北で繁殖し、中部以南で越冬する。県内の分布は局所的で、冬鳥として主に西部地域の一部に生息する。

3. 生息環境

河川敷の草原や牧場、耕作地、耕作放棄地、丈の低い草地などに生息する。

4. 生息状況

接近すると、突然キュルあるいはプルルと聞こえる羽音を残して一直線に飛び去るため、ウズラより先に観察者の方が見つけるという例は少ない。近年の西部地域の生息地はすべて 2007 年の捕獲禁止措置以後の記録である。特に 2014 年頃から渡去前のさえずりが聞かれるようになったことなど、個体数が少しずつ増えているのではないかと感じられる。

かつて繁殖していた富士山麓では、ここ数十年確認事例はない。

5. 減少の主要因と脅威

長年の狩猟圧(41)に生息環境の悪化が拍車をかけたと思われる。かつて河川敷には丈の低い草地が多かったが、グラウンド造成(16)、治水・利水の進行による植生遷移(54)、たとえばつる性植物の蔓延や樹林化が進んだために生息適地はほとんど失われた。圃場整備など(15-2)による草地の減少も憂慮される。

6. 保護対策

生息に適した丈の低い草原の造成は求めようもない。狩猟鳥獣から外されたことがせめてもの拠り所である。なお、対策ではないが、海岸に近い平地の水田の多くで稲刈り後の二番穂の結実したものがそのまま放置されている。餌場でもある草地の減少に代わる餌の供給源としてきわめて好ましい状況である。

7. 特記事項

狩猟鳥獣として長年捕獲され続けた結果、個体数の減少が憂慮されるようになり、2002 年までに一部の府県で狩猟が禁止された。その後、2007～2012 年に全国で一時的な捕獲禁止措置が実施され、さらに 2012 年に環境省レッドリストに記載されたことを踏まえて、2013 年に狩猟鳥獣から外された。

なお、卵などを食用にしているウズラは、本種を家禽化したものである。

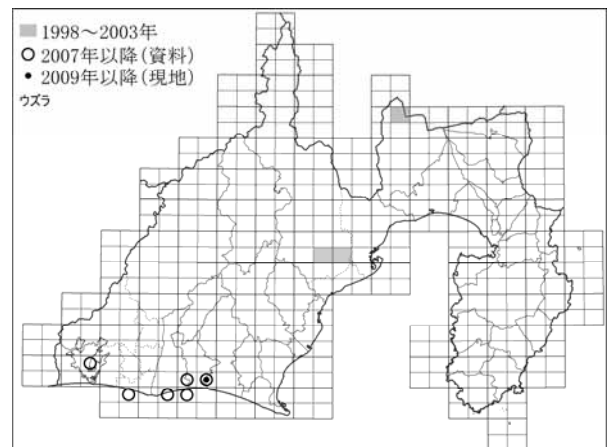
8. 主な文献

北川捷康(2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料. 遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



袋井市浅羽 2018 年 3 月 9 日 小岸宣夫



静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-②) 変更なし

[2004 年版カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) : 環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)]

1. 種の解説

全長はオスが約 43 cm、メスが約 38 cm。オス成鳥の顔の色（黄、黒、緑）の組合せで巴（ともえ）模様を想わせるのが特徴。胸脇の白線も目立つ。メスはコガモのメスに似た地味な褐色をしているが、嘴基部に小さな白斑があるのが特徴である。冬鳥として少数が渡来する。他のカモ類より警戒心が相当強い。昼間は休眠し、日没後に飛び立ち、水田、湿地などへ採餌に行く。主食はイネ、タビエ、タデなどの種子で、水生小動物なども捕食する。冬鳥（対象：越冬地）。

2. 分布

国外ではシベリアのバイカル湖より北東部のツンドラ・森林地帯の湿地で繁殖し、朝鮮半島、中国南部で越冬する。国内では本州、四国、九州で越冬する。日本海側にはやや多く、太平洋側では少ない。県内では西部地方でも少なく、東・中部ではきわめて稀である。毎年越冬するのは磐田市の桶ヶ谷沼だけと考えられている。

3. 生息環境

主に湖沼を好むが、河口、ダム湖などにも姿を見せる。周囲が樹林や抽水植物に囲まれているような環境を好み、広々として視界をさえぎるものがないような環境には長期の滞在はしない傾向が見られる。

4. 生息状況

静岡県レッドデータブック（2004）で毎年桶ヶ谷沼では 10 羽前後が越冬すると報告した。その後の 2004～2013 年の 10 年間の各年の最多越冬数を比較すると、最少が 2006 年の 11 羽、最多が 2011 年の 125 羽、年による多寡はあるが平均すると約 46 羽で、以前より増えている。桶ヶ谷沼以外の場所では同じ磐田市の大池、太田川河口でしばしば観察されており、他の地域においても 1～2 羽が観察されるようになった。生息期間は 11 月～2 月中旬前後で、寒気が厳しい年には、少数が 3 月に見られることがある。

5. 減少の主要因と脅威

桶ヶ谷沼での越冬数は県の自然環境保全地域に指定されて保護の実を上げてきた。しかし、近年の野鳥写真ブーム（71）で見境のない行動に走る者があり、ここ数年は越冬数も減り落ち着かない状況が続いている。本種のメスは狩猟鳥のコガモに酷似し、他地域へ分散すれば狩猟の誤射（41）を招きかねない。

6. 保護対策

磐田市桶ヶ谷沼は鳥獣保護区に、太田川河口と大池は銃猟禁止区域に指定されている。

定期的な越冬地である桶ヶ谷沼で本種の休息場所は決まっているが、2016 年の渡来初期に本種の写真を撮影しようと秘密裏に休息場所付近へ繰り返し侵入した者がいた。並外れて警戒心の強い本種は以後の越冬期間を通して 1 羽も姿を見せなかった。当沼の環境の保全及び管理をより徹底させる必要がある。

7. 特記事項

なし。

8. 主な文献

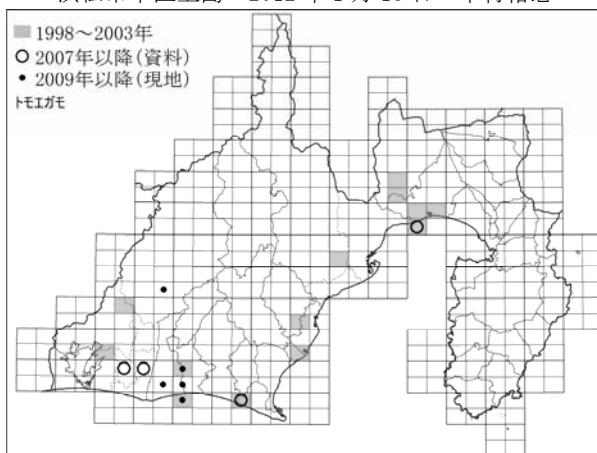
北川捷康（2018）静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料．遠州の自然，41：25-29

北川捷康・武田由紀夫（2005～2014）桶ヶ谷沼の鳥類生息調査－平成 16（2004）～ 25（2013）年度－、桶ヶ谷沼を考える会。

（北川捷康）



©2019 H.Nakamura
浜松市中区上島 2012 年 1 月 15 日 中村裕志



ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus, 1766)

クイナ科 Rallidae

静岡県カテゴリー 絶滅危惧 類(VU) (要件-②) 変更コード 12

[2004年版カテゴリー 絶滅危惧 IB 類 (EN) : 環境省カテゴリー 準絶滅危惧類 (NT)]

1. 種の解説

全長約 23 cm。後頭部から体上面は暗緑褐色、前頭部から顔、首、胸、腹にかけて赤茶色で脚も赤い。脇から下尾筒には白い横縞模様がある。雌雄同色。さえずりは 3 月から聞かれ、コッ・コッ・コッと 1 音ずつ区切った声で始まり、次第にテンポを速めて尻下がりにコココココ・・・と続ける特徴がある。夜間の方がよく鳴くが、昼間でも鳴く。かつては夏鳥とされていたが、現在は県内の生息地では多くが留鳥と思われる。餌は昆虫類、両生類、腹足類などのほかにイネ科の種子などである。(対象：生息地)

2. 分布

国外では中国北東部から朝鮮半島、中国南東部を通してパキスタンまでと東南アジアの島々に分布する。国内では北海道から沖縄までの全国で繁殖し、北海道、本州北部のものは越冬のために南へ渡る。県内では湿地の多い西部地域に集中して広く生息し、湿地の少ない東部・伊豆地域にも少数が生息する。

3. 生息環境

かつては、水田地帯が主な生息場所と考えられていた。しかし圃場整備が進んだ地域では、刈り取りから代掻きまでの半年間は生息に適する場所とは言えなくなった。現在は、池沼や河川敷、養鰻場跡地など、ヨシやマコモなどの生えた湿地、ハス田により多く生息する。

4. 生息状況

繁殖期に特徴のあるさえずりを聞いて生息確認をするという方法が主であり、手間のかかる割に効率の良いものではない。河川の大・中・小を問わず河川敷・低水路、浜名湖周辺に広がる養鰻場跡地、圃場整備の行われていない水田の周辺などの湿地や草むらなどに予想を超えて生息する実態が明らかになった。全国的に繁殖域が北上している傾向があることから、県西部の生息メッシュ数、生息個体数の増加は、越冬個体を含んでいる可能性もある。伊豆地域には生息適地が非常に少ないが南伊豆町蛇石大池で確認している。

5. 減少の主要因と脅威

生息メッシュ数・生息個体数の増加は間違いなことなのでカテゴリーを 1 ランク下げたが、このことを単純には喜べない。圃場整備 (15-2) に加えて、最も生息個体数の多かった浜名湖周辺の養鰻池跡地や浜松市志都呂町の湿地などでは埋め立て (15-1) が急速に進められており、その多くが太陽光発電施設へと変貌している現実がある。河川の植生もクズやアレチウリなどに覆われ、樹林化などの植生遷移 (54) が進行している。この事実こそが最大の脅威である。

6. 保護対策

河川の植生管理、ソーラーパネル設置場所の検討、圃場整備地などの冬水田んぼ化など難題が多い。

7. 特記事項

なし。

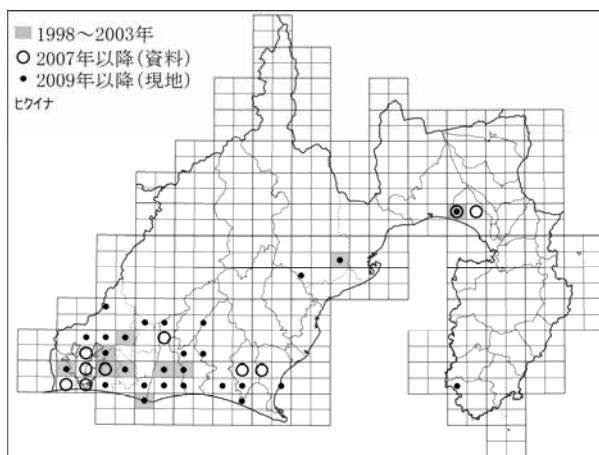
8. 主な文献

北川捷康 (2018) 静岡県 RDB 改訂版の分布図・定量等に係る補足資料。遠州の自然, (41): 25-29

(北川捷康)



沼津市原浮島ヶ原 2015 年 6 月 6 日 渡邊修治



1. 種の解説

全長約 29 cm。全体に黒褐色で、灰褐色や橙褐色の斑紋が虫食い状に入る。雌雄同色。夜行性の地味な鳥だが、細長い翼と長めの尾をもつ横長の体形で、樹枝に平行に止まって眠り、生息環境に見事に溶け込む。飛翔は速く、昼間であれば翼の白斑がよく目立つ。繁殖期には「キョッキョッキョッ・・・」と連続して鳴き、「コワ、コワ、コワ」という声も発する。夜間、飛びながら昆虫を捕食する。夏鳥（対象：繁殖地）。

2. 分布

国外では東アジアから東南アジア、南アジアにかけて分布し、東アジアで繁殖するものは南方へ渡って越冬する。国内では夏鳥として渡来し、九州以北の平地から山地の林に生息する。県内では中部や西部、富士山麓周辺に分布する。

3. 生息環境

山間部の草原や伐開地、畑などが混在する林地に生息する。かつて 1970 年代には標高 100 m 程度の県立森林公園など、平野部周辺の丘陵地帯でも観察されたが、このような生息環境は諸々の造成により減少し、生息域は自ずと山間部へ追いやられている。

4. 生息状況

県内では標高 300 m から 1,000 m 程度の山間部での記録が多いが、生息域は縮小し、その数は総じて減少傾向にある。一方、比較的高い生息密度を保っているところもあり、西部地方の山間部では、夜明け前の 3 時半頃から 50 分程度、数羽のヨタカが鳴き交わす様子を観察した地点がある。もともと伊豆地域での記録は少なく夜行性種の生息の把握は容易ではないこともあり、今回繁殖期の記録はえられなかった。なお、渡りの時には市街地でも目に見ることがある。

5. 減少の主要因と脅威

住宅地・工場用地などの拡大（23、24）が生息域を山間部へ追いやるとともに、山間部では高規格道路の整備（24）や観光施設などの建設に伴う開発行為（23）が生息を脅かす一因となっている。また、中山間地の過疎化や国内林業の不振に伴う森林の荒廃（53）も、生息環境に影響を及ぼしている可能性がある。

6. 保護対策

直接的な保護対策は特にないが、ヨタカの生息域である中山間地の道路整備や諸々の開発行為に関しては、トンネルを増やして動植物の生息域を保護したり過度な照明設備を控えるなど、自然環境や野生生物との共存に配慮した工法が求められる。

7. 特記事項

特になし。

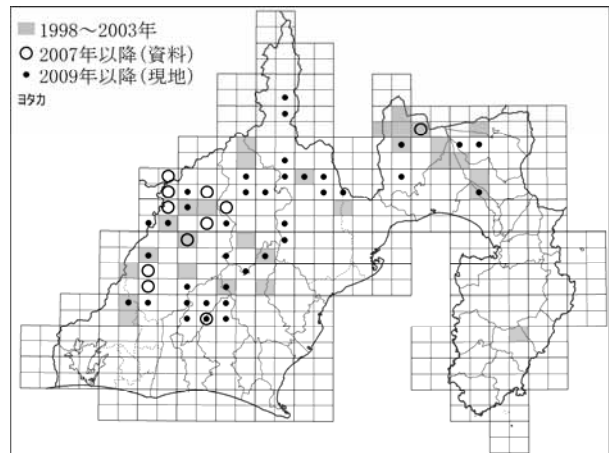
8. 主な文献

高野伸二（1981）日本産鳥類図鑑．東海大学出版会，東京：313-314.

高野伸二（2012）フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版．（財）日本野鳥の会，東京：204-205.



富士市大淵 2001 年 7 月 25 日 渡邊修治



（中村裕志）